

東日本大震災
あの日を未来につなぐ、宮城のいま。

2019.9.11

Vol.
41
September, 2019

ナウイズ
毎月11日発行

NOW IS.



坂本サトル

in 東松島



東松島の「始まり」を感じた。
次は、ここでライブしたい！



NOW IS. 対談 Talk Session

in 東松島 HIGASHIMATSUSHIMA

「外」の力が、東松島に 新しい風を呼ぶ。 生まれ変わった廃校舎。

約3メートルの津波が押し寄せ、犠牲者も出てしまった東松島の野蒜小学校。廃校になったその校舎は、2018年7月に防災体験型宿泊施設「アボコ（H.A.キボッチャ）」として生まれ変わりました。暗い影を落としていたかつての学び舎を、新しい地域の拠点に。挑戦を続ける運営の三井紀代子さんと、ミュージシャンの坂本サトルさんが対談しました。坂本さんは、震災直後、東松島市に支援で訪れています。あの日の姿とこれからの東松島を語ります。

さまざまな側面を持つ
防災教育の拠点施設。

坂本サトルさん（以下坂本）
僕が震災後、初めて東松島に来たのは、2011年4月7日でした。宮戸島への道路がようやく開通した日。宮戸の避難所に行ったとき、「ようやくまともな食事が届いた」と喜んでる人たちの姿を見たのが印象に残っています。被災したまちを見て、言葉もありませんでした。
三井紀代子さん（以下三井）
「KIBOTCHA」では、当時は伝え

Sakamoto Satoru

坂本サトル

さかもと さとる

PROFILE

1967年生まれ、青森県出身。東北大学経済学部在学中に「JIGGER'S SON」のボーカル&ギターとしてメジャーデビュー。1999年ソロ活動開始。東日本大震災後は、友人の声優・山寺宏一さんとともにチャリティイベントを開催するなど、各地で支援活動を行っている。

る展示もなくなっていきます。津波の時間で止まった時計とか、その日の予定が書かれた職員室の黒板とか…。
坂本「色々と思いますね…。
三井「私が東松島に初めて来たのは震災から数年後だったのですが、当時のままだったこの校舎を見て、「私はここで事業をすべきなんだ」と直感しました。関東で行っていた事業をたたんで、家族を残したまま単身赴任で東松島にきました。今はほとんど「KIBOTCHA」に住んでいるようなものです（笑）。

坂本「大浴場があるのには驚きました。気持ちよさそうですね。三井「1階は大浴場やレストラン、宴会場にして、地域の方が気軽に利用できるつくりになっています。地元の方にとって、ここは懐かしい場所であり、震災を思い出してしまう辛い場所でもあるんです。だからこそ、新しい思い出を「KIBOTCHA」でつくってほしいと思っています。昨年、震災後途絶えていた「鳴瀬かき祭り」をここで復活させたんですよ。ほとんど宣伝がでなかつたにも関わらず、大行

列になって！「来てよかった」「賑わいが戻ってきた」とすごく喜んでもらえたんです。こういう機会をこれからも持ちたいな、と強く感じました。
坂本「「外からの目線」って大事ですよ。地元の方同士だと感情的なことか難しいこともあるでしょうけど、「よそから来た人」だからこそ、状況を俯瞰で見られたり、地元の方が気をつけていない魅力を見つけられたり、ということもあるでしょうから。
三井「そう思います。最初は受

け入れてもらえるか不安だったんですが、いろいろなかたちで関わり続けるうちに、たくさん協力していただけるようになりました。今回新しく「林間ビーチ」というバーベキューエリアをつくったのですが、私たちが草刈りしていると、地元の業者さんがやってきて、いっぺんにきれいにしてくれました。本当にありがたいし、やってよかったなと思います。
坂本「林間ビーチ、すごくいいですね！ステージ作ったら野外ライブもできそう！

三井「ぜひ来てください！坂本「うれしいですね！まさにこうやって新しいことが始まっていくのだと感動しています。外の力を入れて、必要なものを提案していく姿、頼もしいですね。震災後、僕たちミュージシャンは避難所や仮設住宅などでのライブ、というのが分かりやすい支援でしたが、被災地は次のフェイズに移っている。今後どういうふうな地域の賑わいを手伝っていけばいいのか、僕たちもよく考えなければならぬと思います。

Mii Kiyoko

三井紀代子

みいきよこ

PROFILE

1973年生まれ、山口県出身。航空自衛隊で勤務後、24歳で起業。携帯電話販売代理店、中国向けインターネットを活用した教育サイトなどの運営を経て、自衛隊OBらと貴源庁株式会社を設立。命を守る防災教育を普及する活動に取り組んでいる。



地域の方に「KIBOTCHA」で
新しい思い出をつくってほしい！



活躍する応援職員

SUPPORT POWER



2020年以降も 関係を築いていきたい

東松島市
復興政策部復興政策課
復興政策班
はぐい のおまき
羽咋 伸晃 さん
山形県東根市より
東松島市に派遣

「東松島市の派遣から戻った先輩にいろいろ話を聞いて、自分も復興のお手伝いをしたいと思い、志願しました」。そう話す羽咋さんは、山形県東根市から2019年4月に東松島市の復興政策部に派遣職員としてやってきました。

復興政策部では、補助金の交付に関する業務に携わり、主に「東松島市地域活性化復興モデル事業補助金」と「心の復興」事業補助金を担当しています。「東松島市地域活性化復興モデル事業補助金」は、復興まちづくりを推進することを目的に、地域活性化や復興まちづくりに資する活動を行う団体に対して補助金を交付する事業です。「心の復興」事業は、被災者心身のケア、生きがいづくりやコミュニティ形成の促進など、復興の進展に伴う課題に対応した支援活動を行う団体へ補助金を交付する事業です。申請書類の取りまとめ、申請に関する各団体の相談やアドバイスの対応、「住民のみなさんがあたたかく接してください」ので、復興の役に立ちたいと、より業務に力が入ります。



「東根市は海がないので、奥松島の風景がとても好きです」と羽咋さん。

「災害時行政実務研修」を行っていろいろな話を聞いて、自分も復興のお手伝いをしたいと思い、志願しました。回は、避難所設置の研修でした。ケガ人や家族連れ、ベット連れや旅行者を、どのように区分し、部屋割りはどうするのかなど、即座に判断せねばなりません。災害廃棄物の処理がテーマの時もあり、毎回テーマが異なります。実戦に近い形式なのでとても勉強になります。東根市でも活かしていきたいです。「復興業務は2020年度までですが、様々なケアを必要とする方がいると思います。復興業務ではなくても、東根市は友好都市としてこれからも交流の機会があるので、協力していきたいですね」と話してくれました。

AREA information

宮城オルレ奥松島コースオープン1周年キャンペーン

「オルレ」は韓国・済州島で始まったトレッキングコースの名称です。昨年オープンした宮城オルレの「奥松島コース」の1周年を記念して、イベントを開催します。

●1周年記念セレモニー

ホーストレッキングや特産品のお振舞が行われます。ぜひ、ご参加ください。
※9月29日(日)～10月5日(土)までのキャンペーン期間中、オリジナルグッズをプレゼントします。
☎0225-82-1111(内線番号2167、東松島市商工観光課)

●アニバーサリー・オルレ

●日時:9月29日(日)9:30～14:30、●募集人数:20人 ●参加費:2,000円
☎0225-87-2322(東松島観光物産協会)

ライドハンターズin東松島

ライドハンターズは、「ハンティングMAP」のスポットをまわり、獲得した特典を競うエリア探索サイクリングです。高得点を目標し、作戦を立てながら東松島の街を駆け巡りましょう。



●エントリー:9月19日(木)まで ●開催日:10月5日(土)
詳しくはHPをご確認ください。
<http://www.tour-de-nippon.jp/series/ridehunters-higashimatsushima/>

復興や防災にまつわるニュースをお伝えします

普段は近くでウロウロして、 必要な時に寄り添う。 音楽家としての支援。



さまざまな立場で
関わり続けること。

「震災に限らず、廃校になった学校をどうしようかっていう問題を抱える地域は、今後も日本中で出てくる。学校はもともと地域の中心だった場所でしょう。KIBOTCHAは、そういう地域の

モデルケースになりそうですね」と振り返る坂本さん。「震災後、慰問公演というものには考えさせられるシーンが多かったですね。ある避難所では、朝から晩まで慰問というパフォーマンスが繰り広げられるわけですが、そこで生活している方には騒音ではない場合だってあるわけです。

それに気づいてからは、呼ばれたら歌うという姿勢に徹している。今日のように歌ってほしいといってもらえるのは、とてもうれしいです。

次に訪れたのは、ソックモンキー「おのくん」の制作・販売の拠点「空の駅」。小野駅前応急仮設住宅の人々の手仕事として始ま

り、今では、全国に多くのファン「里親」がいます。「人形を買った人のことを、里親と呼んでるの？」と坂本さん。リーダーの武田文子さんは頷きます。「親になったみたいなきもちで東松島のことを広めてほしいと思ってるの。名字は『めんどくしえ、めんどくしえって言いながら作るから』。おどけてそう話す武田さんですが、震災の日、壮絶な経験をしていました。「車で逃げて、津波に飲まれたの。首まで水に浸かって冷たくて。もうダメだと思ったとき、切り株が窓を破ったから、そこから逃げたの」。硬い表情で聞き入る坂本さん。「私の命以外、何にも残らなかった。涙が出るまで、2年かかった。大人だから、笑うのはできるんだけどね」。ああ、と声を漏らす坂本さん。

「僕、4月9日に小野の公民館で歌っているんです。ぜひ、と言われて引き受けたはいいもの、ここで歌っていいの、何を歌おう



ソックモンキー「おのくん」を持って、「空の駅」にて。



「おのくん」の制作者であり、語り部としての役割も担う武田文子さん(右)とプロジェクトの代表、新城隼さん(左)。



ソックス1足から1体の「おのくん」が誕生します。

って。覚悟を決めて歌い始めた。前の方の人たちからとどんどん泣き出すんです。その人たちも『震災後、初めて泣いた』って。ずっと心に引っかかってたんだけど、あれでよかったのかもしれない。』。そう思う、と武田さん。

「食べ物以外も、いろんな支援があったんです」。

坂本さんは、さっそくお気に入り「おのくん」の「里親」に。京都から移住してプロジェクトを運営する新城隼さんと「D&M」におのくんの「生誕祭」をやっているの、ぜひ来ててください」と握手を交わしました。

ここに注目!
NOW IS. EYE'S



名字が「めんどくしえ」、名前が「おのくん」。10人ほどの縫い手が手作りしています。ソックモンキーを選んだのは、当時物資として送られてきた靴下が余っていたから。靴下、綿の支援は、今も継続して募集しています。



「寄り添う、ってことなんだろうな」。取材を終え、坂本さんはそうつぶやきます。「僕たちがエイターができることって、背中を押すでも、手を引っ張るでもなく、寄り添うこと。背中を押すのは、今日会った三井さんや新城さんのような人で、いつも隣にいますよ、声かけてください、って言うのが音楽にできることなんだ。出さず引きすぎず、普段は近くでウロウロして、そんな存在感がいいんじゃないかなと思っています」。

「KIBOTCHA」の「林間ビーチ」では防災体験と組み合わせたバーベキューを楽しめます。グランピングのようなスペースも。

check! 01
非日常を意識した生活。
津波は遠いことではない。



福島県の新地町では、台風が近づくと、岸につながれていた漁船を港の中へ共同で避難させる(2018年6月10日)

伝承の手法は 浜の語りに学べ。

「津波から逃げる時、あの山に登った。後ろから来る人に草履をつかまれたので、脱いで逃げた。上まで登って振り返ったら、後ろに人はいなくて、着物の裾が濡れていた」という100年近く前の経験が語り継がれている家もあります。「苦しい経験は人に話したいという心理も、伝承に役立っているように感じます」。「玄関先にはわらじをつるせ」という言い伝えは、いざという時に履いて逃げる履物を準備しておけ、ということ。「さらには、毎日見る玄関に履物がつるしてあることで、防災を常に意識するよう工夫しているんですね」。「津波の前の晩、夜中に隣の屋根をスリッパでピタピタ歩く足音を聞いた」などの怖い語りも、小さい子どもの意識に「防災文化」を根付かせるために役立ちます。

「自然と体一つで対峙する漁師は、災害に関しては人間側の問題として、どう対処できるかを考えているのだと思います。子や孫に経験を語り、防災を生活の中に根付かせる。彼ら



『風俗画報』に描かれた、明治の三陸大津波

東日本大震災の記憶の風化が懸念される中、今現在も伝承施設や語り部など、さまざまな方法で「伝える」取り組みが行われていますが、立派な建物が建てられず、情報を伝える手段も少なかった時代の人々は、どうやって災害の経験を伝えてきたのでしょうか。そのヒントを与えてくれるのが民俗学です。三陸を中心に、浜や港町の人々に調査を重ねてきた川島研究員はこう話します。「津波

は、浜の人々にとって、『たまにある』ことです。自分の経験、じいちゃんの経験を、普段から語っていました。非日常を意識して生きているんですね。例えば、ある家では「津波が来たら雨戸を閉めて逃げる」と語り継がれていました。立地上、家屋が流失する可能性が低くても、家具や漁具が外へ流れ出ないようにしなさい、ということですね。

check! 02
身近であること。
いつも
聞いていること。

にとって大仰な学びは必要ない。あの人から聞いた、うちではこう聞いたという身近な防災意識が、生き抜くことにつながるのだと思います」。

NOW IS. 防災

BOSAI FRONT LINE

PROFILE

川島 秀一 研究員



神奈川大学日本常民文化研究所、東北大学災害科学国際研究所教授を経て、現在、同研究所でシニア研究員。気仙沼出身で自ら被災している。漁村や港町に暮らす人々を中心に、民俗や信仰、生命観などを研究。

Vol.5

INFORMATION from MIYAGI

〔宮城県からのお知らせ〕

01 「東北・みやぎ復興マラソン2019」が開催されます。

今年も10月12日(土)・13日(日)の2日間名取市・岩沼市・亘理町を舞台に「東北・みやぎ復興マラソン2019」が開催されます。全国各地から1万人以上のランナーが集まる東北最大規模のマラソン大会です。本大会の特色である、「はらこ飯」や「ホタテ浜焼き」など宮城や東北の食が楽しめるエイドステーションを18カ所に設置し、皆さんに楽しんでいただけるイベントを開催します。



- 開催日時 10月12日(土)・13日(日)
- 開催場所 仙台放送ジュニパーク岩沼(岩沼海浜緑地)北ブロック
- HP <https://fukko-marathon.jp/>

※当日はコース周辺で交通規制が実施されます。

02 「第40回全国豊かな海づくり大会～食材王国みやぎ大会～」1年前プレイベント開催

2020年の秋に、「第40回全国豊かな海づくり大会～食材王国みやぎ大会～」が石巻市を会場に開催されます。この大会の開催を記念し、10月13日(日)に石巻魚市場で「1年前プレイベント」を開催します。当日は、記念式典や漁船による海上パレード、稚魚の記念放流などを行うほか、「第30回いしのまき大漁まつり」が同時開催されます。



さらに、10月19日(土)及び20日(日)の両日には、仙台市勾当台公園で「豊かな海づくりフェスタ2019」を開催します。当日は、震災からの復興状況や本県水産業の紹介、ミニ水族館やおさかなタッチプール、森と海とのつながりをテーマにしたブースなどが設置されるほか、「みやぎまるごとフェスティバル2019」が同時開催されます。どちらのイベントも、大人から子供まで楽しめる企画で皆様をお待ちしています。ぜひご来場ください。

MEDIA INFORMATION



みやぎ復興情報ポータルサイトは
こちらから!



<https://www.fukkomiyaagi.jp>

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」をリニューアルしました!復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取り組みなどを発信します。

最新情報を
ブログで!

ブログピックアップ

宮城発! 元気と食の 最新情報



一般社団法人
IkiZen

震災復興に軸足を置き、被災地企業の販路開拓や商品開発、広報活動支援などを行っています。

8月上旬、勾当台公園グリーンハウス跡地に、「Route 227s' Cafe TOHOKU by humming bird」がオープン。「東北へ、つづくみち」をコンセプトに東北227市町村の魅力を発信しています。食、伝統、文化、東北の人たちが織りなす物語をどう伝えていくのかをレポートします。

NOW IS. 復興 インタビュー



NOW IS.
取材チーム

日々、被災地を巡っているNOW IS.取材チームが、被災地で復興に向けてさまざまな取り組みを行う団体などを紹介します。

2018年に再開した「海岸公園冒険広場」を運営する冒険あそび場せんだいみやぎネットワーク。震災の津波による休園期間中も遊びが持つ「心のケア」の役割や、コミュニティ形成の機能に注目し、遊び場づくりを通じて被災地域の復興に取り組まれました。

「みやぎ復興情報ポータルサイト」内の「NOW IS.復興レポート」をご覧ください。

●いまを発信!復興みやぎ



SNS「いまを発信!復興みやぎ」では、取材チームが見た被災地の「いま」を発信しています。皆さまからの投稿もお待ちしております。ハッシュタグ「#fukkomiyaagi」をつけて、撮影した画像をお寄せください。

●NOW IS.メールマガジン

NOW IS.の発行日(土日・祝日のときは翌平日)にメールでお知らせします。

NOW IS.メールマガジンで検索して登録!

取材 こぼれ話 Voice from STAFF

感銘を受けた曲

今回のNOW IS.にご協力いただいた坂本サトルさんは、仙台市で結成されたJIGGER'S SONのボーカル&ギタリストでもあります。2001年に解散しましたが、震災後の2012年に再結成!震災やお父様の死を経て再認識したという「続いていく命の連鎖」を歌った再結成後初のシングル「パトロン」は、ポロリと涙が流れる1曲です。そんなJIGGER'S SONの今年のライブは9月21日(土)に仙台市で開催されます!



みやぎのタカラ

Treasures of Miyagi

宮城県が得た震災の教訓や復興の道筋は、未来に役立つ宝に育ちつつあります。
この地で生きる人々の想いととも、世界に発信していきます。



FILE
No. 5

KIBOTCHA (キボッチャ)

貴源庁株式会社

遊びながら身につく
新しいスタイルの防災

津波で大きな被害を受けた旧野蒜小学校の校舎を活用した防災体験型宿泊施設KIBOTCHA(キボッチャ)は2018年7月にオープンしました。名前の由来は「希望」と「防災」、「Future(未来)」を組み合わせた造語です。

1階は地域の人たちが気軽に利用できるコミュニティフロア、2階は伝承コーナーやプレイルームなどがある防災学習施設、3階は個人旅行でも研修でも使える宿泊施設になっています。プレイルームは、子どもたちが体を使って遊べる遊具がずらり。「震災直後に被災地に来た時、ストレスをためている小さな子どもたちにたくさん出会いました。天気や環境に気兼ねなく、思い切り遊べる場所をつくってあげたいと思ったんです」と代表の三井さん。開館から1年がたち、プレイルームの常連になる親子連れも増えたそう。社内研修などでの利用や視察も多く、防災を学ぶ施設としてのモデルケースになりつつあります。



NOW IS. 

発行：2019年9月11日 宮城県震災復興本部(事務局：震災復興推進課)
〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号
Tel: 022-211-2408 Fax: 022-211-2493

『復興情報発信プロジェクト NOW IS.』は、宮城の復興の「いま」を伝えるプロジェクトです。

 宮城県
Miyagi Prefectural Government